

読売歌壇

小池 光選

賞状がずらりと並ぶ部屋で寝る古き昭和の家に暮らせば

【評】これはいかにも昭和の家。家族がもらってきた賞状を額に入れて、ずらりと鴨居に飾る。先祖代々の遺影なども並ぶ。その下で布団を敷いて畳の上に寝る。ああ、昭和は遠い。特急が速度落さず過ぎゆける小さな駅の町に老いゆく

【評】特急電車がとんとん止まらず過ぎてゆく町である。その町に生きて、生活して、年老いた。結句の「老いゆく」にはとなる。無欲な人生の、その重さが伝わってくる。威厳ある論吉の顔がすると スーパーのレジに吸い込まれゆく

【評】旧紙幣の一万円札は福沢諭吉。スーパーもセルフレジになって自分でお札を入れる。消え行く論吉、さよなら論吉。

首周りに布団をぎゅっと押し込んでポンと叩いてくれた母の手 ひたちなか市 新山 英輔
裸婦像のモデルとなりし君はまだ裸婦像のまま記憶に生きる 鴻巣市 加藤 健司
コンビニのすみで白髪の老人が不祝儀袋をえらぶ雪の日 仙台市 岩間 啓二

つまずいた石に謝る孫がいてこの胸に咲く一輪の桜 奈良県 松本 悦子
野良猫の一家が日毎素通りす母にしたがう春子に秋子 浜松市 藤田 亜耶

行きつけの床屋の主人聞き上手秘め事までも暴露かたたりし 国分寺市 加藤 武夫
補聴器をやっと装着せし夫呼ばば隣の部屋より「はー」と 神戸市 岡田三和子

栗木 京子選

桃色の河津桜を見上げれば三角、四角に空色嵌まる

【評】河津桜のきれいな桃色の向こうに青空が見える。びっしりと咲いた花の隙間の空を「三角、四角」と捉えたところが斬新。「嵌まる」という動詞の選択も冴えている。

京へ五里奈良へ五里とう町がある春の城陽菜の花のなか 大和郡山市 四方 護

【評】京都府の城陽市。京都と奈良の真ん中に位置する。二つの都まで程良い距離と言えよう。「五里」という表現が趣深い。菜の花の季節感も歌に華やきを添えている。

父の顔知らない我がひ孫抱くこのようこびを父に感謝す 横須賀市 飯迫 孝江

【評】父の顔を知らずに育った作者だが、ひ孫へと続く血縁を思うとき父への感謝があふれる。初句と結句の「父」が心に残る。

庭かざる色取り取りの風車染しくなるよと孫のおみやげ 市川市 井上二二六
臘梅の香りききつつ森行けば山鳥の声高く響きぬ 八王子市 高丸 洋子
人恋つる程の早さか一斉に陽に紅梅は花咲かせいる 太田市 松島 純
震災から十五年経ち壊れたアスファルト残る埋め立て地に住む 千葉市 佐藤 綾子
水涵れてダム湖の底に現れる国道の文字歪む標識 神戸市 太田 節男
上空のトンビの目には「これどうぞ」と映ってたのか友の手のピザ 東京都 飯塚 佳代
本を読む背中にてそりと音がする百合のひとつひら落ちる真昼間 静岡市 藤田 淳美

俵 万智選

友達になってと言って始まって同じ言葉を書かれて終わる

【評】「友達になる」という同じ言葉が、恋愛の始めと終わりとでは、まったく逆の意味合いを持つという不思議。簡潔な表現で、時間の流れとドラマが過不足なく伝わってくる。

弁当も間取りに見えて寝るダブルサイズのだし巻きベッド 柏崎市 桜川 京香

【評】配置を考えるという点では、確かに似ている。「だし巻きベッド」という造語が、強引ながら上手い。間取りのことで頭がいっぱいな様子が、ユーモラスに伝わってくる。

雪原のポストカードにぼつぼつと修正液のようになアザラシ 横濱市 富尾 大地

【評】ゴマファザラシだろうか。修正液とは意表を突いた比喩だが、雪と生き物という質感の違う白を捉えて説得力がある。

夜桜の気持ちになれば世界とは光まみれのジグソーパズル 松本市 飛和 君の読むニューステロップカラオケの歌詞のごとくに人殺し告ぐ 東京都 浅倉 修
白き花咲かせし梅のその幹は怒れるごとく曲がりいるなり 狭山市 奥蘭 道昭
人が減り仕事減らずに残業を減らそうとする取り組みがある 大和郡山市 大津 穂波
古びたる卒業記念の壁面にてわれの描きし月の欠けおり 大阪府 原 拓
入口と出口の違うバスを降りコンビニ入ればこれは入口 守口市 小杉なんきん
質問の場でありながらどの人も自身の窮状訴えている 堺市 一條 智美

黒瀬 珂瀾選

白亜紀の空より来たといふやうに青鷲はじつと遠くを見つむ 宇治市 浜岡 学

【評】田んぼや川辺にたたく青鷲。孤高の精神性を思わせるその姿は、時空の彼方からの来訪者のよう。自然の神秘を感じますね。春なのに家のみゆきを聞いているちよつと川でも行つてごようか 八王子市 新 冬青

【評】中島みゆき作詞作曲の「春なのに」。柏原芳恵の大ヒット曲だが、右歌のは中島のセルフカバー版かな。春なのにお別れですか……。寂しさの中に春の輝きを感じます。

ポディプロローが効き過ぎておりコンビニで価格を見ては戻す大福 木更津市 渡部 直人

【評】物価高がじわじわと暮らしを痛めつけてくる。繰り返してパンチを受けるような苦しさに、節約せざるを得ない私たちの現実。大福くらい、好きに食べたいですよ。

濁水の土地に恵みの雨ふれり草木も虫も春へ急がな 宇陀市 大畑美千代
雪柳の葉のあをを芽吹く道いたはりあふて杖の老いふたり 新発田市 加藤じゃすみん
家族だと思つて手術をやりますとの若き主治医にわが胃を託す 西条市 山本美知子
そのむかし火を噴きしとう山に小さく生きて今日の残照 群馬県 真庭 義夫
うすれゆく意識へとどけと義姉の手を力のかき握りしめた 福岡市 古賀 悦子

軍刀に手を置く兄を囲みたる家族七人皆々若し相模原市 荒井 篤
戦争を知らないわれは竹の面学生らの遺作の前 甲斐市 後藤 栄子

次回は14日(火)掲載予定
◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから 右の影絵はいちねんせい